猟師の息子

マルタ

昔むかし、あるところに、王さまがいました。王さまにはお姫さまがひとりありましたが、いつも息子がほしいと思っていました。

あるとき、王さまはコックに、

「どこからか男の子を探してきてはくれないか。養ってやりたいんだが」とたのみました。

コックは、

「貧しい猟師を知っていますが、そいつならきっと息子をひとりくれるでしょう」といいました。王さまはさっそくコックを猟師のところにつかわして、息子のうちのひとりをくれないか、もしくれたら、その子を自分の子として育てたいのだがとたずねさせました。

猟師は、よろこんで、

「願ってもないことです。王さまにわしの四歳になる息子をさしあげましょう」といいました。

王さまのお姫さまもちょうど四歳でした。猟師の息子とお姫さまはきょうだいのように育てられ、とても仲良くなりました。やがて猟師の息子はりっぱな若者になり、お姫さまも美しい娘になりました。

ある日のこと、お姫さまが母親の所に行って、若者と結婚したいといいました。それを聞いて、王さまは、お姫さまにいいました。

「わしはあの子を王の息子として育ててきた。だから、結婚式を終えてふたりで寝室にもどっても、けっして、ほんとうは猟師の息子なんだということをいってはいけないよ。もしもいったら、いっしょに暮らすことができなくなるからね」

まもなく、若者とお姫さまは結婚しました。結婚式のあと、ふたりは寝室にもどって楽しくおしゃべりを始めました。お姫さまは、

「ああ、思いどおりになってよかったわ。あなたはほんとは、貧しい猟師の息子だったのにね」といいました。それを聞いたとたん、若者は腹を立て、結婚式の衣装をお姫さまの足元に投げすてて、部屋から出ていきました。そして、歩きに歩き、遠いよその国へ行ってしまいました。

若者は、道で出会った貧しい男と服を取りかえて、また歩いていきました。ただ、ダイ

ヤモンドの指輪だけは腰ひもの中に隠しておきました。
やがて、若者は、ある町の王さまのお城で、台所の下働きとして働くことになりました。若者は、口がきけないふりをして、身ぶり手ぶりで話をしました。
あるとき、王さまが台所に下りてきて、美しい顔立ちをした若者に気づきました。そしてコックに、
「あれはいったいだれだね」とたずねました。コックは、
「あれは、うちの台所の下働きです。なかなかよく働くのですが、残念なことに口がきけません」と答えました。王さまは、
「あいつは、素晴らしい若者だ。よし、わしがきっとあの子に言葉をとりもどさせてやろう」といいました。そして、すぐにおふれを出しました。
「わが城の下働きの若者に、言葉をとりもどさせることができた者を、王の後継ぎにしよう。だが、失敗した者は、首を切られるだろう」
すると、たくさんのお医者や学者たちが、若者に言葉をとりもどさせようとやって来ました。けれども、みな失敗して首を切られてしまいました。とうとう、やってみる者はだれもいなくなりました。
あるときのことです。若者がスープのお皿を洗っていて、うっかり手をすべらせて落としそうになりました。若者は思わず、
「おっと、あやうく皿を割るところだった」といいました。コックはこれを聞いて、
（あいつ、口がきけるじゃないか）と思いました。
コックは、王さまのところに行って、
「わたしが、あの若者に言葉をとりもどしてみせます」といいました。王さまは、
「いやいや。おまえはなぜ命を捨てようとするんだ」といって、とめました。けれどもコックは、
「王さま、ご心配なく。あいつはきっと話せるようになります」といいはりました。王さまは、
「よろしい。ではおまえに三日間あたえよう。三日たってもあの男がしゃべらなかったら、おまえの首を切らせるぞ」といいわたしました。
コックは、若者とふたりきりで部屋にとじこもり、なんとかしてしゃべらせようとしま

したが、何を聞いても若者は答えません。コックは腹を立てて、若者をむちで打ち、着物をひき裂きました。そのとき、腰ひもが切れてダイヤモンドの指輪が転がり落ちました。コックは、急いで指輪を拾ってお城から逃げだしました。

コックは旅をつづけ、ある国にたどり着きました。コックは、指輪を売って食べ物を手に入れようと思って、商人のところに行きました。ところが商人は、

「ダイヤモンドなんて、買ってくれるのは王さまだけさ」といって、買ってくれません。そこでコックはお城へ行きました。お城のお姫さまは指輪を見て、それが愛する若者の物だとすぐに気づきました。

「あなたは、この指輪をどこから持ってきたの」

「お姫さま、これはわたしの物ではなくて、ある城の貧しい下働きの物なのです」

コックはそういって、口をきけない若者のことを話し、王さまがこの若者に言葉をとりもどさせることができた者を後継ぎにする、失敗したら死刑だとおふれを出したことなど、すべて話しました。お姫さまはこれを聞くと、コックにお金をやって立ち去らせました。

つぎの日、お姫さまは男の服装で、若者のいるお城へ出かけていきました。そして王さまに、若者に言葉をとりもどしてやるためにやって来たといいました。けれども王さまは、

「いや、わしはもうこれ以上、人の首を切らせたくないのだ」といいました。男に化けたお姫さまは、

「わたしに、最後の試みをさせてください」とたのみました。王さまは承知して、お姫さまを若者の部屋につれて行きました。

ふたりきりになると、お姫さまは若者にいいました。

「あなたを猟師の息子だといったことを、どうかゆるしてください」

けれども、若者は返事をしませんでした。そこで、お姫さまは首切り役人にひきわたされることになりました。

いよいよ、広場に引きだされ、首が切られるというとき、お姫さまは王さまに、

「どうか、三言だけいわせてください」とたのみました。王さまは承知しました。お姫さまはいいました。

「だれか、わたしの命を三ペニヒで買ってくれませんか」

だれも返事をしません。お姫さまはもういちどいいました。

「だれか、わたしの命を二ペニヒで買ってくれませんか」
みな押し黙ったままです。
「だれか、わたしの命を一ペニヒで買ってくれませんか」
そのとき、若者がさけびました。
「ぼくが買おう」
こうして、若者は言葉をとりもどしたのです。
王さまは、お姫さまに、
「おまえにこの国をあたえよう」といいました。けれども、お姫さまは男の服を脱ぎ、
「じつはわたしはある国の王女なのです。結婚式の晩に、夫に猟師の息子だといったために、夫は出ていってしまいました。それがこの人なのです」と話しました。
若者はお姫さまをゆるし、王さまは若者を後継ぎにしました。そこで、ふたりは、ふたつの国を治め、ふたつのお城で交代に住んで、いつまでもしあわせに暮しました。

資料　『世界の民話13地中海』小澤俊夫編訳／ぎょうせい

村上郁　再話